

1

歩道及び自転車歩行者道(以下「歩道等」という)

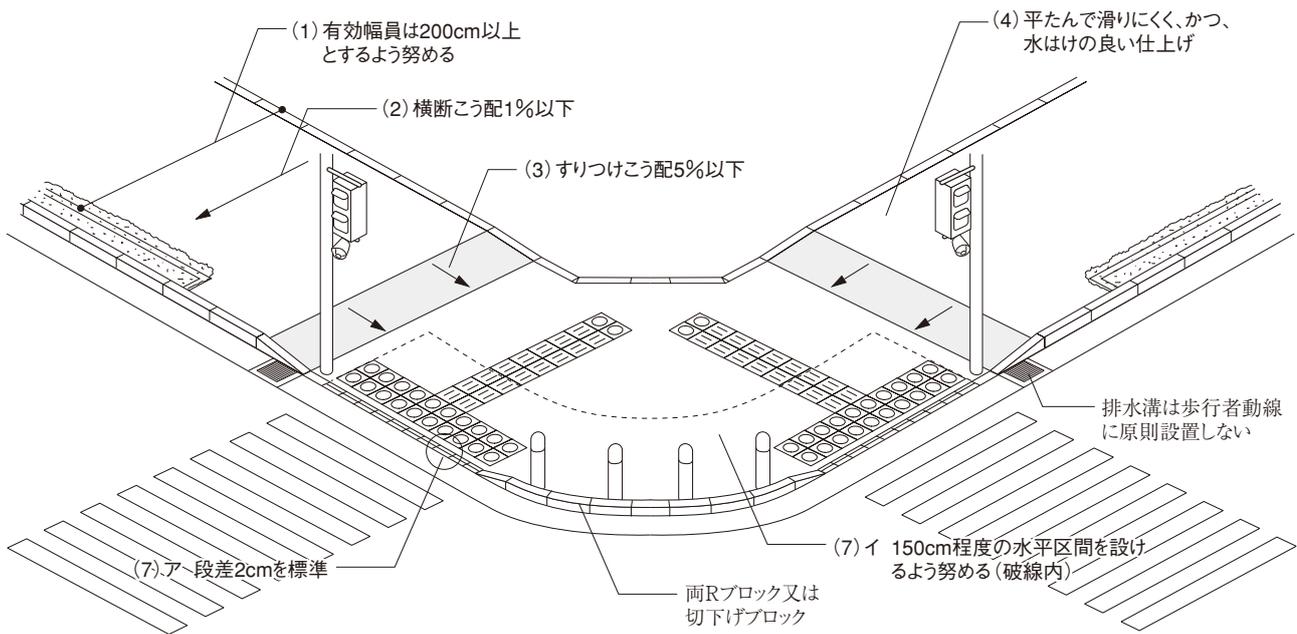
整備の基本的な考え方

○福祉のまちづくりのためには、道路施設のうち、歩行者の安全上特に重要な歩道等の整備が必要である。

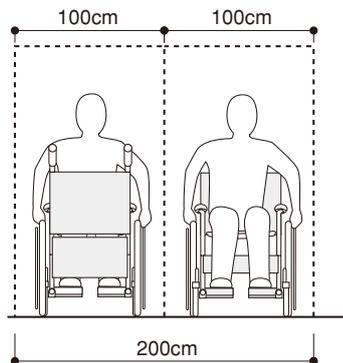
整備基準		解 説	望ましい水準
歩道等を設ける場合は、次に定める構造とすること。			
(1) 有効幅員	有効幅員は、200cm以上とするよう努めること。	●道路構造令においては、自転車歩行者同の有効幅員は、300cm以上である。	
(2) 横断こう配	横断こう配は、1%以下とすること。ただし、地形の状況その他の特別の理由によりやむを得ない場合においては、2%以下とすることができる。		
(3) すりつけこう配	歩道等のすりつけこう配は、5%以下とすること。ただし、地形の状況その他の特別の理由によりやむを得ない場合においては、8%以下とすることができる。		
(4) 舗装	路面は、平たんで、滑りにくく、かつ、水はけの良い仕上げとすること。		
(5) 溝ぶたの構造	排水溝には、つえ等が落ち込まない構造の溝ぶたを設けること。		
(6) 車道との区分	車道又は自転車道との区分は、縁石、防護さく、植樹帯等により明確にすること。		
(7) 歩道等と車道の接する部分の構造	歩道等が交差点又は横断歩道において車道と接する部分は、次に定める構造とすること。		
ア 境界部分の段差	車道との境界部分の段差は、2cmを標準とし、かつ、車いす使用者の通行に支障のない構造とすること。	●交通バリアフリー法に基づく重点整備地区において実施される道路特定事業にあっては、視覚障害者の識別性を確保すること等の条件が満たされた場合は、歩車道の境界部分の段差は2cm未満とすることも可能である。	
イ すりつけ区間と車道の接する部分の構造	すりつけ区間と車道と接する部分の間に、長さ150cm以上の水平区間を設けるよう努めること。		
(8) 中央分離帯	横断歩道が中央分離帯を横切る部分は、車道と同一の高さですりつけること。ただし、歩行者及び自転車の横断の安全を確保するために、中央分離帯で滞留させる必要がある場合には、車道との境界部分の段差は、2cmを標準とすること。		

□交差点部の整備例

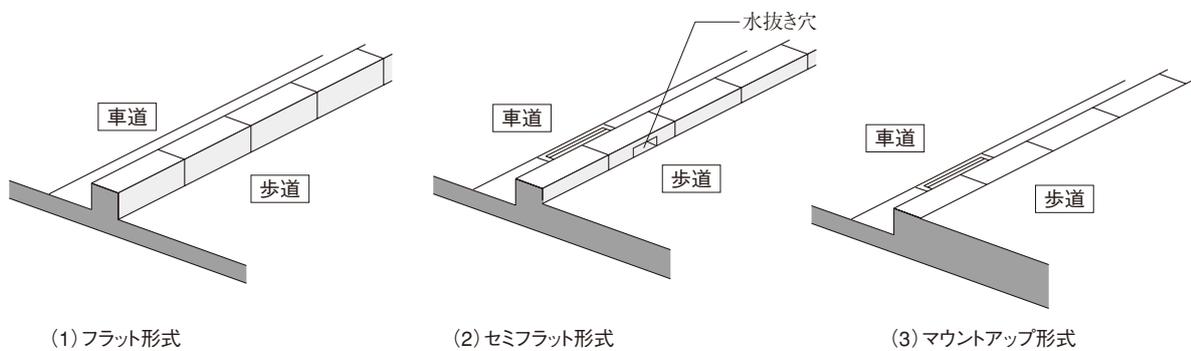
交差点等に接続する歩道等の部分(セミフラット式の場合)



●歩道の幅員の考え方

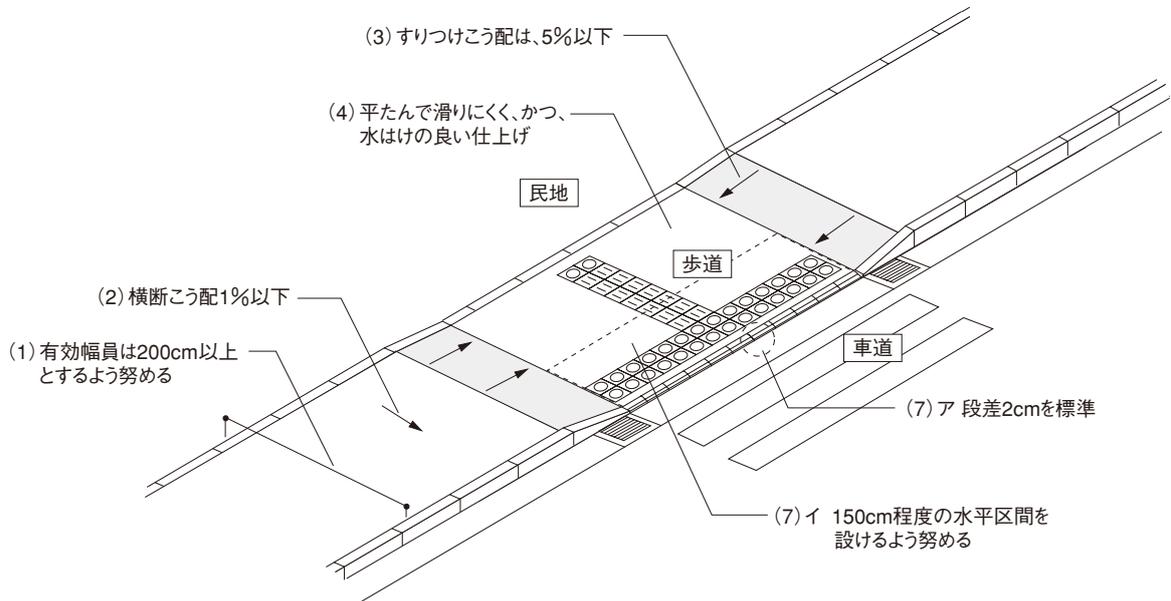


●歩道等の形式

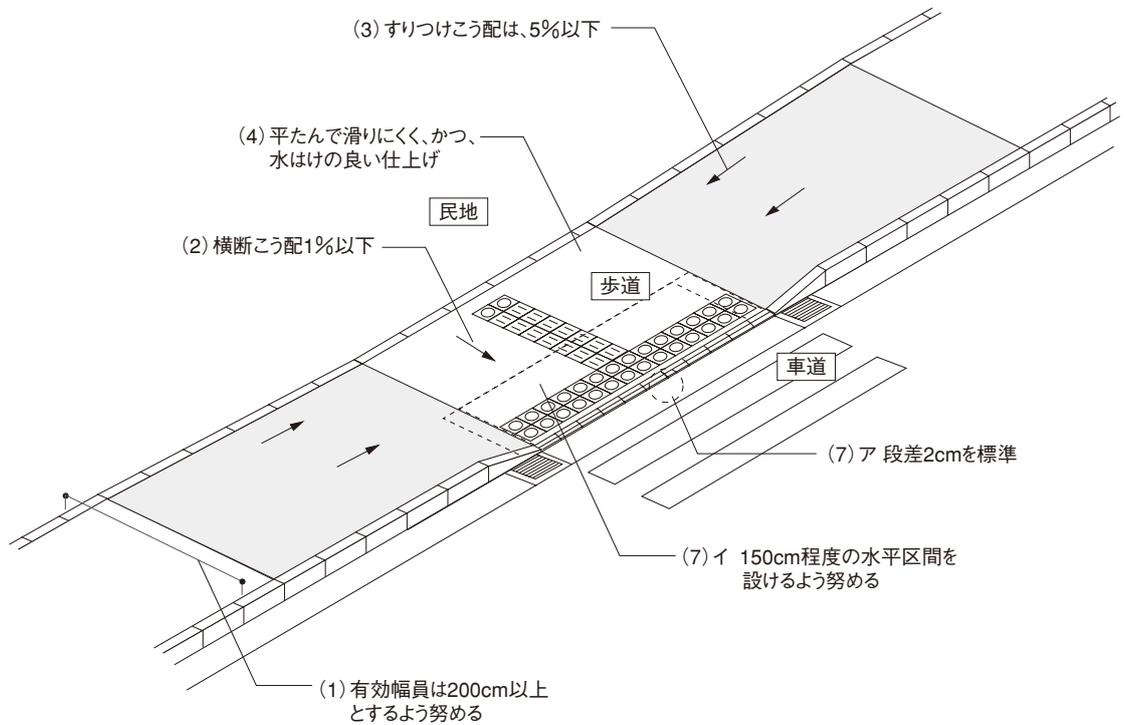


横断歩道に接続する歩道等の部分の整備例

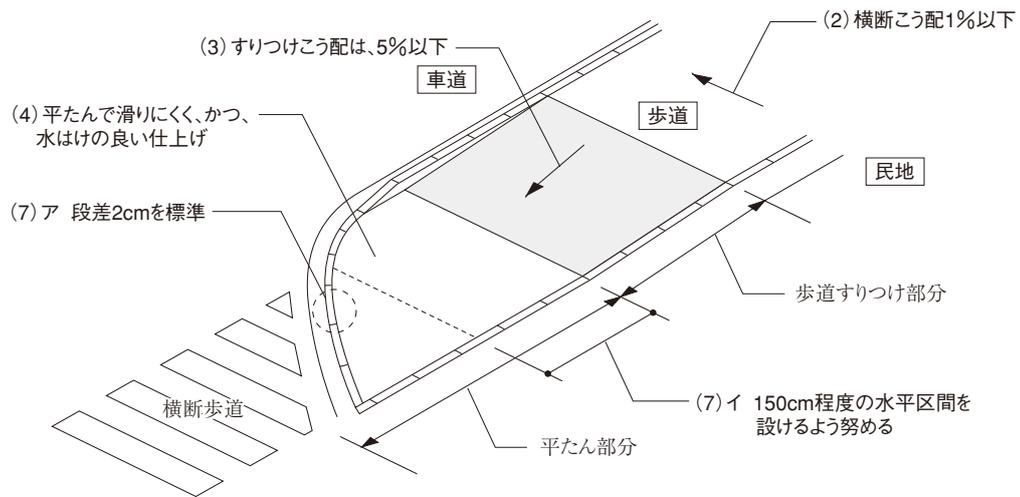
●セミフラット形式の場合



●マウントアップ形式の場合

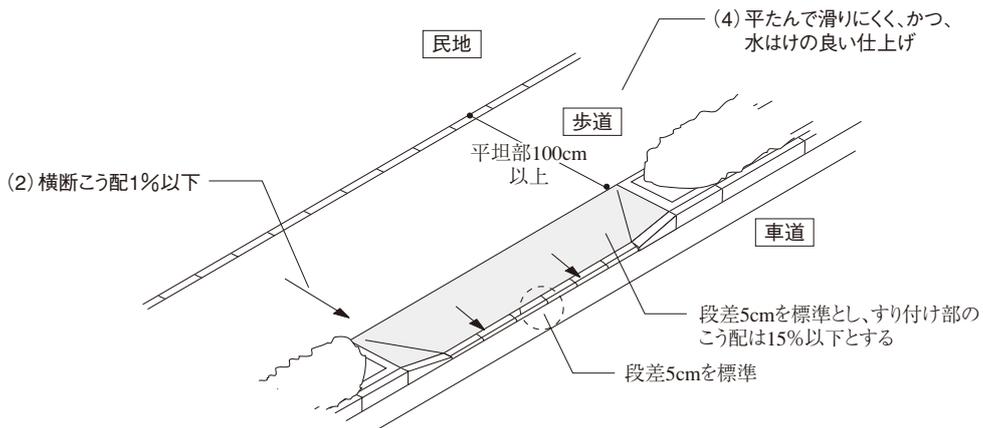


●マウントアップ形式の場合（枝道等との交差部分も含む）

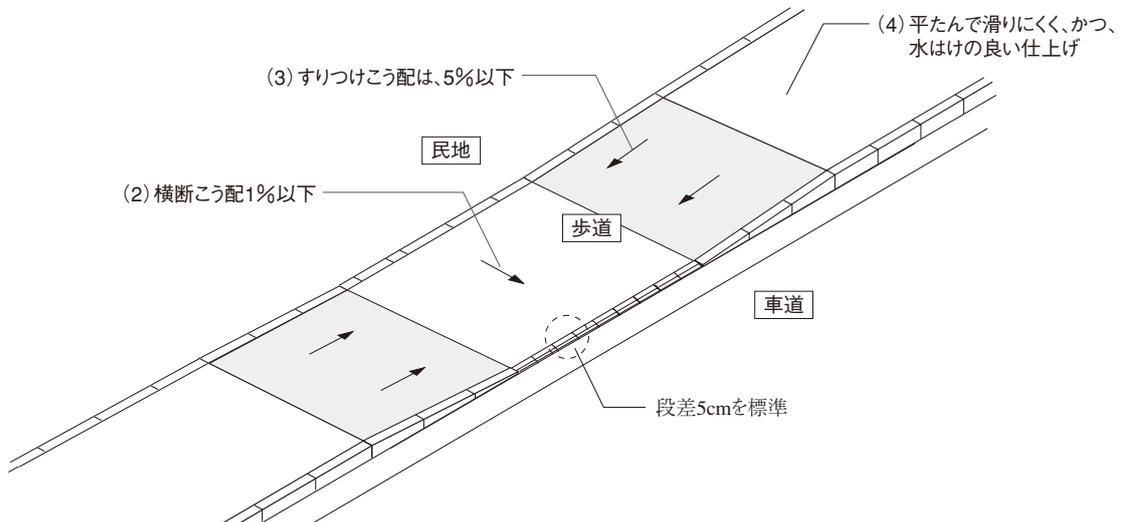


車両乗り入れ部のすりつけ整備例

●歩道等内ですりつける場合

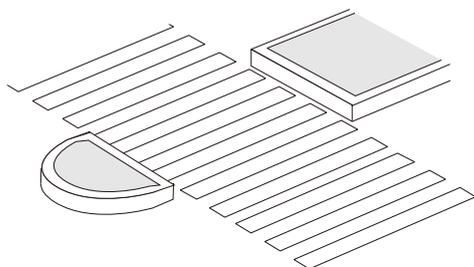


●全面切下げの場合



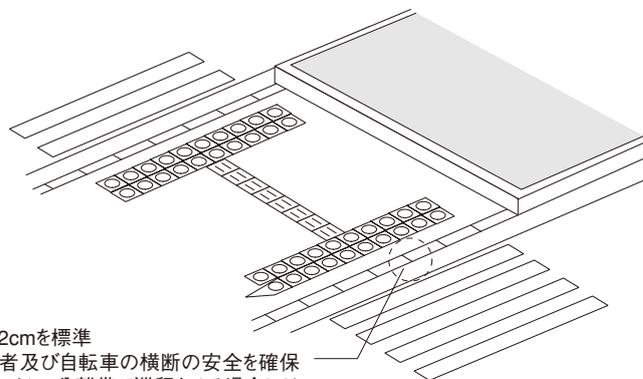
中央分離帯がある場合の整備例

●狭い中央分離帯の場合



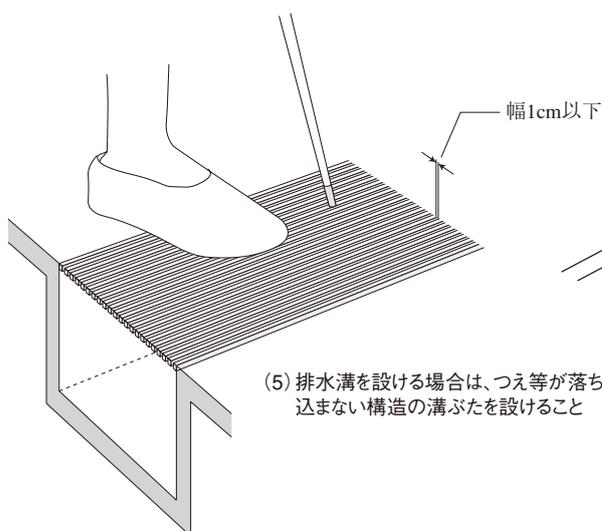
(8) 横断歩道が中央分離帯を横切る部分は、車道と同一の高さですりつけること

●広い中央分離帯の場合



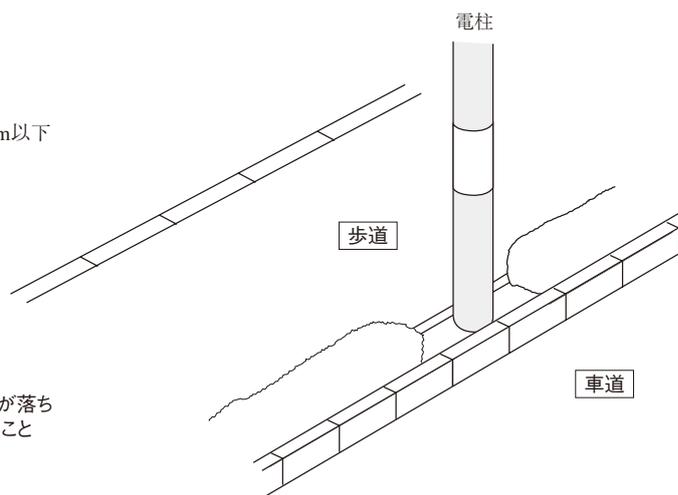
段差2cmを標準
歩行者及び自転車の横断の安全を確保するために、分離帯で滞留させる場合には、その段差は、2cmを標準とする

排水溝の溝ぶたの例



(5) 排水溝を設ける場合は、つえ等が落ち込まない構造の溝ぶたを設けること

やむを得ず歩道内に設置される場合の電柱の位置例



2

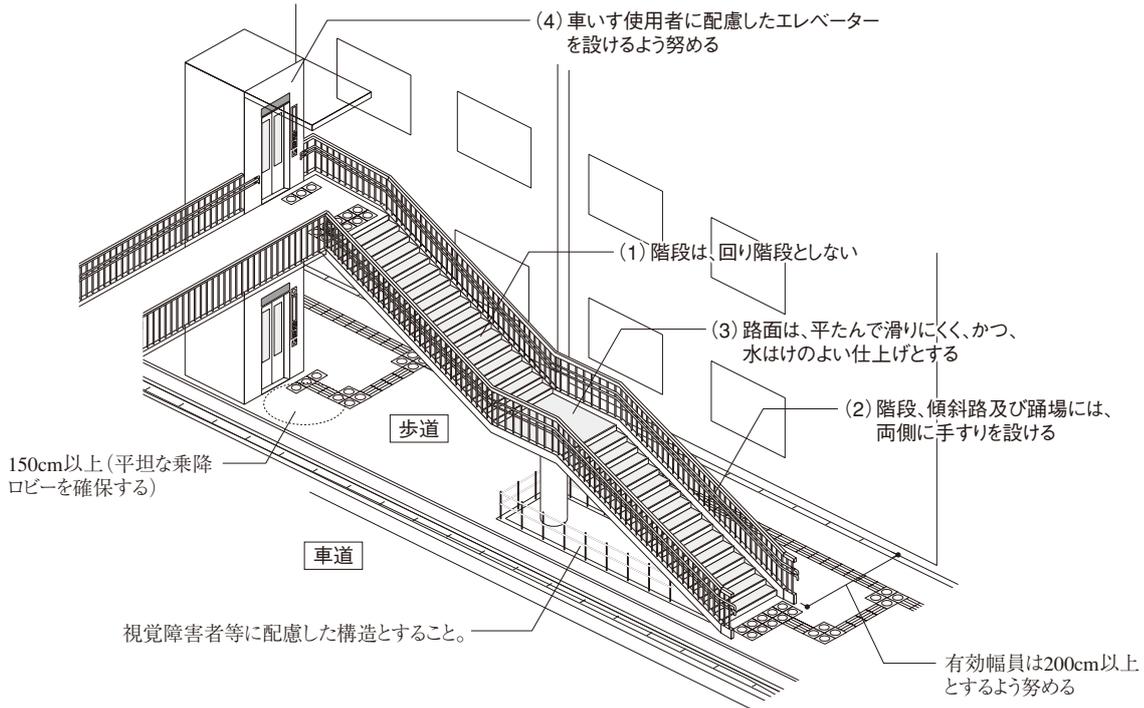
横断歩道橋及び地下横断歩道(以下「立体横断施設」という)

整備の基本的な考え方

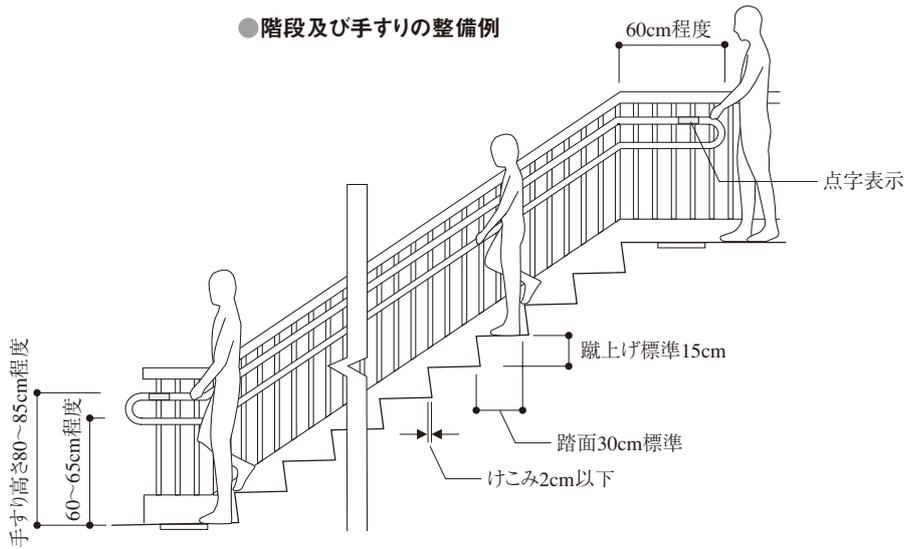
○福祉のまちづくりのためには、道路施設のうち、歩行者の安全に配慮した立体横断施設の整備が必要である。

整備基準		解説	望ましい水準
障害者、高齢者等の移動の円滑化のために必要であると認められる箇所には、次に定める構造の立体横断施設を設けること。			
(1) 回り階段の禁止	階段は、回り階段としないこと。		
(2) 手すりの設置	階段、傾斜路及び踊場には、両側に手すりを設けること。		
(3) 路面の仕上	路面は、滑りにくく、かつ、水はけの良い仕上げとすること。		
(4) 傾斜路等の設置	車いす使用者に配慮したエレベーター又は傾斜路を設けるよう努めること。		

□立体横断施設の整備例

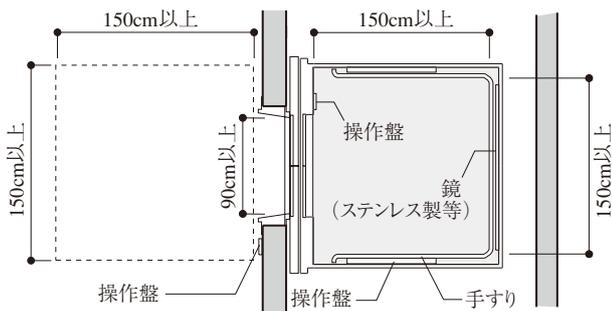


●階段及び手すりの整備例

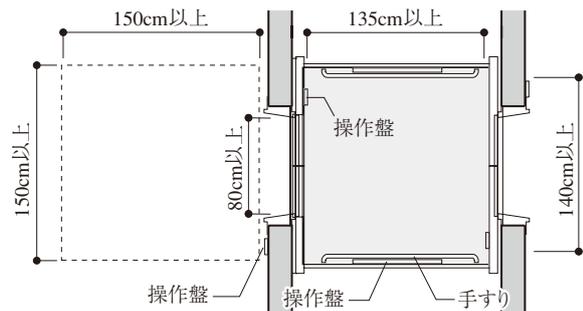


●エレベーターの寸法例

【出入口が1箇所の場合】



【出入口が2箇所の場合】



3

視覚障害者誘導用ブロック

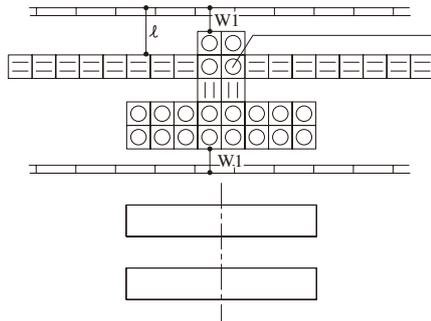
整備の基本的な考え方

○福祉のまちづくりのためには、歩道等において視覚障害者を誘導する視覚障害者誘導用ブロックの整備が必要である。

整備基準	解説	望ましい水準
(1) 歩道等が交差点又は横断歩道において車道と接する部分、立体横断施設の昇降口の部分等注意を喚起する必要がある箇所には、視覚障害者誘導用ブロックを敷設すること。	<ul style="list-style-type: none"> ●形状、寸法については、JIS規格に合わせたものとする。 ●ブロックの色は、黄色を基本とすること。 	
(2) 公共交通機関の施設から別の公共交通機関又は視覚障害者の利用の多い施設へと通ずる歩道等にあつては、進路や施設の案内を行うことが必要である箇所には、視覚障害者誘導用ブロックを敷設すること。	<ul style="list-style-type: none"> ●「視覚障害者の利用が多い施設」：盲学校、視覚障害者情報提供施設のように専ら視覚障害者の利用に供する施設、市役所、区役所、総合病院等、特に多数の者の利用に供する施設 	

●横断歩道の敷設例

【継続的直線歩行を案内している場合】

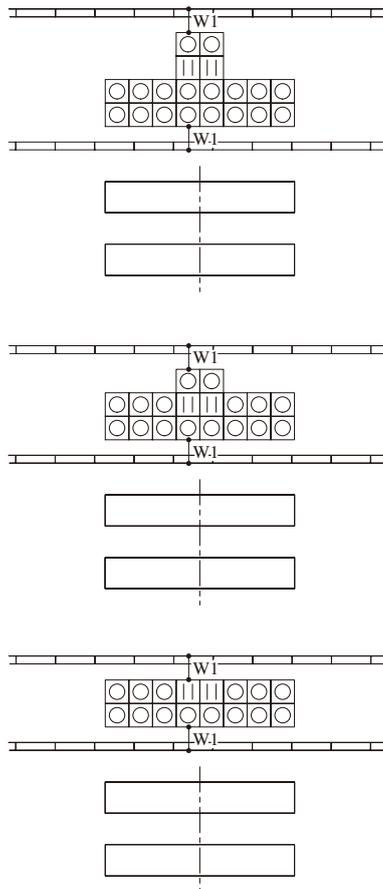


この部分を点状ブロックとし、ここが分岐点であることを案内することとする。

W1 : 30cm程度

λ : 60cm程度(ただし、路上施設や占用物件の設置状況などによって、この値とすることが適切ではない場合は、この限りではない。)

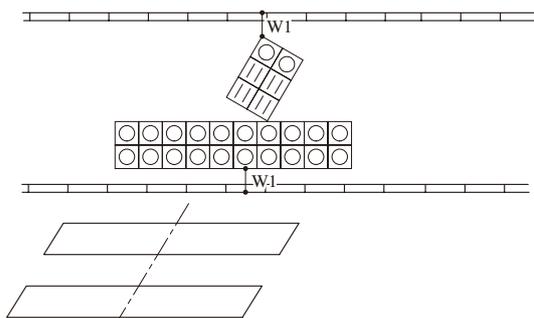
【歩道幅員が狭い場合】



W1 : 30cm程度

注) 線状ブロックで、横断歩道上の歩行方向及び横断歩道の中心部を案内することが望ましい。

【やむを得ず横断歩道が斜めの場合の敷設例】



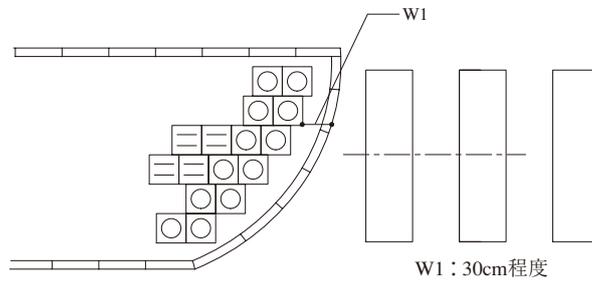
W1 : 30cm程度

注) 視覚障害者は、視覚障害者誘導用ブロック及び縁石の配列と、横断歩道が垂直に交わるという認識により、横断歩道を横断するという意見があり、横断歩道が斜めの場合の対策を検討する必要がある。

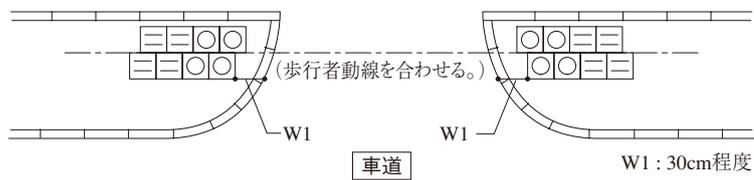
注) 横断歩道の方向と線状ブロックの線状突起の方向とを同一方向にすることが望ましい。

● 歩道巻込部の敷設例

【歩道幅員が広い場合】

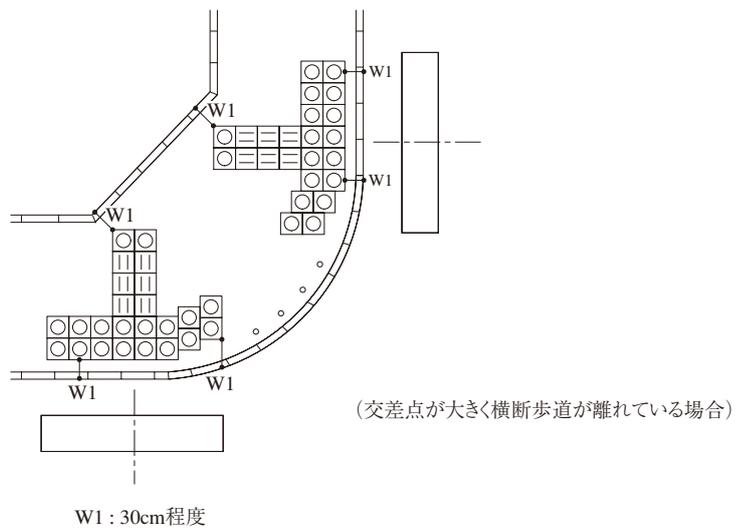


【歩道幅員が狭い場合】

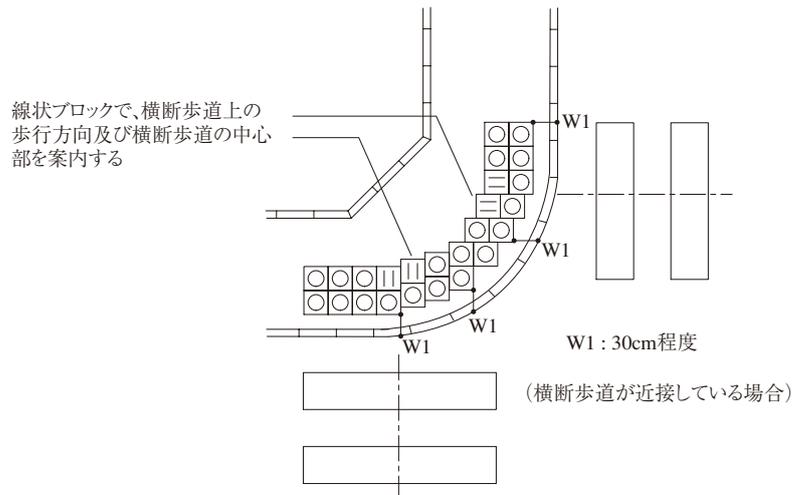


注) 横断歩道の有無に関わらず歩道巻き込み部には視覚障害者誘導用ブロックを設置する。

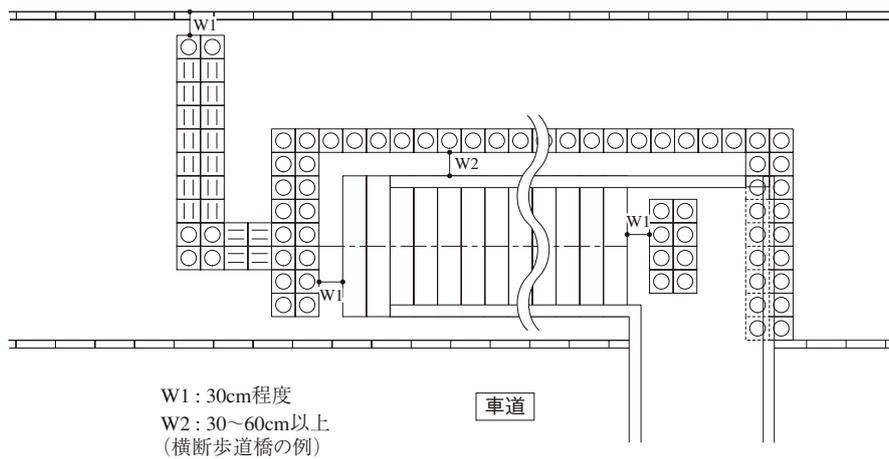
【2方向に横断が生じる場合（歩道幅員が広い場合）】



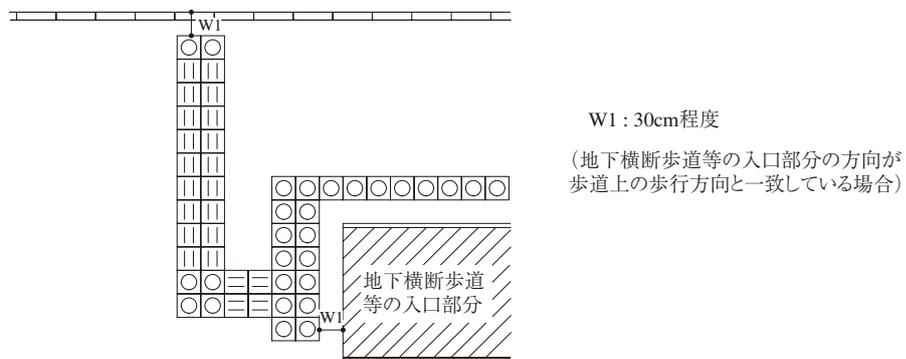
【2方向に横断が生じる場合（歩道幅員が狭い場合）】



● 立体横断施設の昇降口（階段部）の敷設例

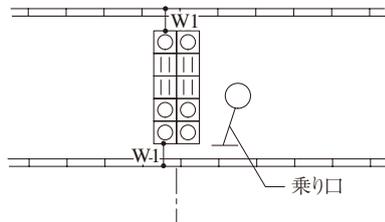


● 地下横断歩道の昇降部の敷設例

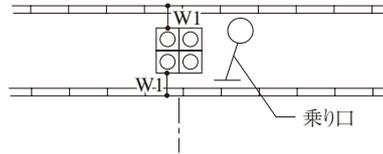


●バス停部の敷設例

【歩道幅員が広い場合】

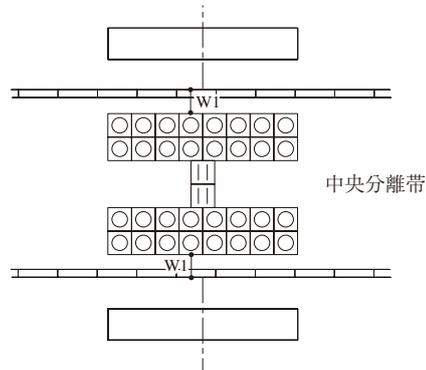


【歩道幅員が狭い場合】



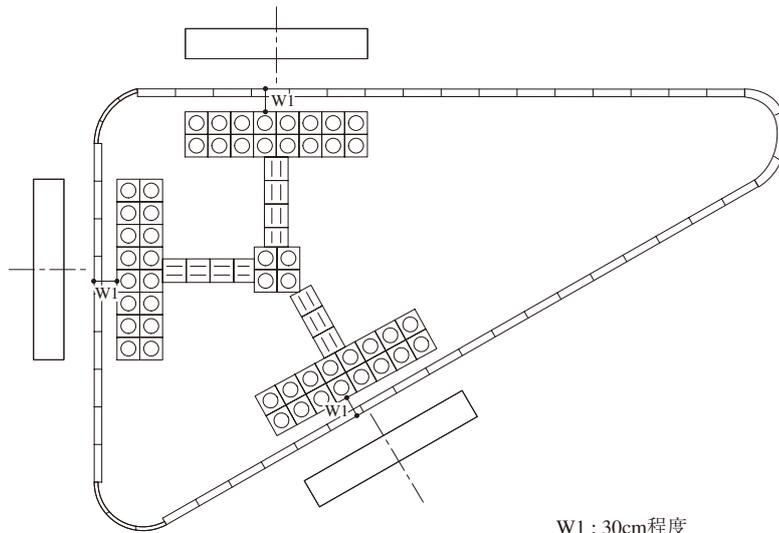
W1 : 30cm程度

●中央分離帯の敷設例(広い中央分離帯の場合)



W1 : 30cm程度

●交通島の敷設例



W1 : 30cm程度

4

視覚障害者用信号機

整備の基本的な考え方

○福祉のまちづくりのためには、交差点等において視覚障害者用信号機の整備が必要である。

整備基準	解 説	望ましい水準
<p>信号機により交通整理の行われている交差点又は横断歩道において、視覚障害者の横断の安全を確保する必要がある場合は、視覚障害者用信号機を設置するよう努めること。</p>	<p>●「視覚障害者の横断の安全を確保する必要がある場合」の典型的な例として、付近に公共交通機関の施設や視覚障害者の利用が多い施設がある場合、交通量が多く危険度の高い場合などが考えられる。</p>	

5

上屋

整備の基本的な考え方

○福祉のまちづくりのためには、バス停留所及びタクシー乗場には上屋の設置が望ましい。

整備基準	解 説	望ましい水準
バス停留所及びタクシー乗場には、上屋を設けるよう努めること。		